

茨城県蛇沼の水草の変遷

齊藤吉永

茨城県の「河童」で有名な画家であった小川芋銭画伯の住まれた牛久沼畔から南東に約3.5 km程の所に蛇沼がある。

この蛇沼の北東1 km足らずには、助けられた狐が女に化けて恩返しをしたという葛葉狐の様な伝説の女化稲荷が祀られている。

蛇沼の名のいわれは判らないが沼の恰好は夜間狐がひそやかにしのび足で歩くのにも似ている。頭から尻尾までの長さ、即ち長径約600 m程の小さい沼だが1982(昭和57年)までは水草が豊富であった。

代表的なものはノタスキモ *Utricularia pilosa* Makino (タヌキモ科)、コウホネ *Nuphar japonicum* DC. (スイレン科)、ジュンサイ *Brasenia schreberi* J. F.

Gmel. (スイレン科)、ハゴロモモ (別名フサジュンサイ) *Cabomba caroliniana* A. Gray (スイレン科)、ヒツジグサ *Nymphaea tetragona* Georgi var. *angusta* Casp. subvar. *orientalis* Casp. (スイレン科)、シャジクモ *Chara coronata* A. Br. (シャジクモ科) 等で特にジュンサイは沼の全域に繁茂し、附近の農家では小舟を浮かべてこれを採集して食用に供していた。

さきに1982年まではと記したが、これは大滝末男会長等と1982. 5. 3. に高貴の方の御希望があって「コウホネ」を求めて千葉県の手賀沼、印旛沼等かつてコウホネの産地をさがし歩いたが見当らず最後に蛇沼に辿りつく、ここだけは豊富で(写真参照) やっとの思いで生品の標品を手に入れることができた。

蛇沼には大滝会長と4日程、筆者個人では相当足を運んでいて、以前ハイキング雑誌にハイキングコースとし



写真1. (上)、2. (下)、コウホネ、
写真1. 左は大滝会長 (1982. 5. 3)

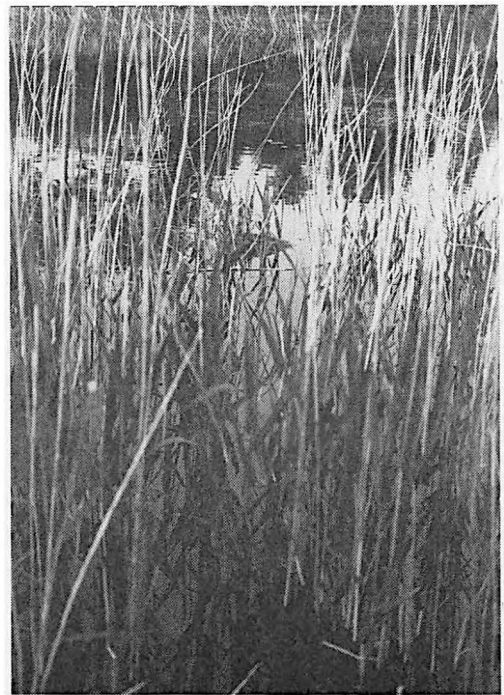


写真3. ヨシの群落 (1982. 5. 3)

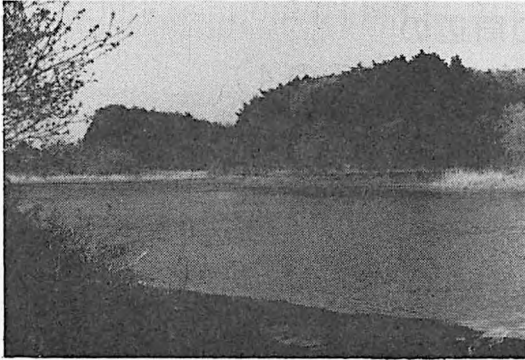


写真4. 水生植物の消滅した蛇沼
(1986. 4. 29)

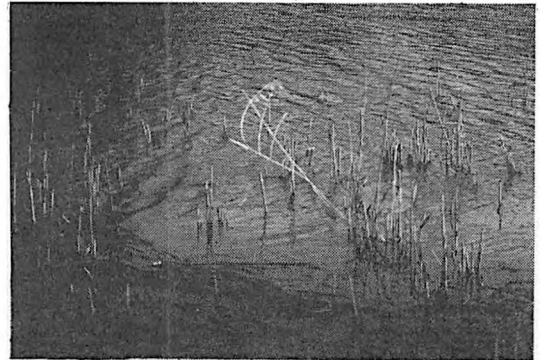


写真5. 蛇沼には僅かのヨシが生えているだけ
(1986. 4. 29)

で紹介したところ。現在日本の画壇で著名な画伯や柳原白蓮女史の弟さん御夫妻を御案内したこともあって都会に近い秘境だと喜ばれたものであった。

その秘境の蛇沼に1年後の1983. 5. 21. (昭和58年)に訪れたところ、何んと驚くべきことがあった。沼全体の水草は1本残らず消えうせ、ヨシさえ枯れていたのである。附近の知り合いの農家で尋ねたが、わけが判りませんというばかり。

考えて見るとこの頃、日本住宅公園、茨城県の外郭団地による大規模な住宅団地の造成が沼の周辺で始まっていたので、その工事に使用したセメントとか別の何かの

原因に基づく影響だろうが惨憺たる有様であった。

その後の調査で復活したのは「ノタヌキモ」だけで本年(1989. 6. 6)の調査でも沼周辺のミズオトギリ、ヒメハッカ、シロネ、クサレダマ、ノハナショウブ、ショウブは少し見られたが、ヨシでさえまだ水中にはごく少数しか見られない仕末で消滅から7年と経過してもこの程度で、自然は一度破壊すると復活にはどの位の日時を要するのか計り知れないことを知った。

特に為政者は大いに心すべきであろうと考える。

(1989. 7. 10)

○大分県植物誌刊行会「新版大分県植物誌」(同刊行会発行、1989年8月、806頁、頒価8000円)

本書は大分県植物誌刊行会が1975年以来“標本に基づいた精度の高い植物誌の刊行”を目指して続けてこられた10余年間の努力の結実である。全体の構成は、口絵(カラー)、標本写真、地質、気候、植生、植物研究史、文献目録、県産植物の概要、植物目録、分布図(300図余り)、他となっている。

同県に産するコケ植物、シダ植物、種子植物のすべての種を、生育環境、産地とともにまとめた471ページにのぼる植物目録が圧巻である。水草のところを特に注意して目を通したが、ヒメバイカモが大分県に産することは、私にとって初知見であった。ガマが〔少〕でコガマが〔やや普〕というところにも興味をひかれた(ガマに“大形のガマ”と“小形のガマ”が存在し、後者がしばしば「コガマ」と同定されている現実と、コガマの正体

そのものが再検討を要するという問題点が明らかになっており、大分県のガマ属の実態に興味をもった訳である)。また、この目録には挙がっていないが、オオトリゲモ、オグラノフサモ、イヌタヌキモは大分県に産する可能性が高いので、類似種の再検討も含めて今後の課題としていただきたい。また、植物研究史は、本草学の時代から、まさにこの植物誌の完成までを跡づけたものだが、その歴史の中で生きてきた人ならではのリアルな筆致で描かれていて、貴重で興味深い一章となっている。

(角野康郎)